北村透谷の文体-手紙から散文へ-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学日本文学研究会 公開日: 2009-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡部, 隆志 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/5373

北村透谷の文体

——手紙から散文へ——

岡部隆志

一

野山嘉正氏は「北村透谷の散文」（文学49・8）で、透谷の言語への意識について次のように述べている。

透谷の散文が外見上の撞着を物ともせぬ力を持っているのは、自己の感覚以外の何者も頼りにならぬことを透谷がよく知っていたからであり、それなくして自己と時代の核心に到達し得ないと信じていたからである。透谷の文学好きとは、言語にその信念を十全な形で託し得るとの信頼に他ならなかった。「一呼吸にあゝいふ処へ躍り入ったやうな風に見えた。」という島崎藤村は的を射ているであろう。透谷論の方法の最大の躓きの石は、この透谷の鋭い直感が言語意識をどのように規制したかという点にある。この点を抜きにすると、透谷の文章の細部の矛盾にとらわれ、或いは外側から論証して結局当体に辿り着けぬという事態に落ち込む。

透谷と言葉とのかかわりといったものが、的確に指摘されている。野山氏の述べる通り、確かに透谷は言葉を選ぶに際し、「自己の感覚以外の何者も頼りにならぬことを」よく知っていた。それは、詩や小説での透谷の表現における仮構性が、透谷の内面の吐露の手段として限定され、作品全体の仮構という形で結実しなかったことと符号しよう。透谷の言語への意識は、自己に懐胎した観念をもどかしい思いで言葉に置き換えていくことに集中していて、その言葉がある作品世界の全体の秩序のなかにどう位置付けられるかという、そのような言葉の選択には向かっていないのである。[注1] 従って、作品世界全体の仮構性が強く求められる詩や小説においては、透谷の表現意識はうまく適合しない。無媒介的に借りられた伝統的(通俗的)表現の形式のなかに、透谷固有の言葉を挿入するということにならざるを得なかった。

だが、散文（評論）においては、このような透谷の表現意識はうまく機能したと思われる。その理由は、評論という形式がジャンルとして新しいということがまずあったろう。借りるべきどんな伝統形式もなかったはずである。また、評論は、詩や小説のような作品

としての仮構性によって必ず表現されなければならない、というものでもない。書き手の考えている内容が論理として伝達出来れば、美文でなくとも評論は成立するのである。「小説家たるを得んと」自負した透谷だったが、透谷の言葉へのかかわりの性格を考えれば、散文（評論）において書き手としての面目を発揮するのは当然であったと言えるだろう。

だが、評論もまた、詩や小説とは違った意味での仮構性を必要とする。それを文体と言ってもいい。例えば、透谷が傾倒しまた反発した徳富蘇峰や山路愛山の漢文を読み下したような文体を想起すればよい。詩や小説の従来の形式に収まり切らない透谷の言葉への意識は、当然、このような文体を素直に受容したとは思えない。それは、野山氏が述べるように「透谷の鋭い直感が言語意識をどのように規制したか」という問題として、透谷の散文（評論）の文体にあらわれるはずである。

それは、透谷論を書く評者の問題である前に、透谷自身の問題として語られねばならないだろう。透谷が、自分の考えていたこともしくは考えあぐねていたことを、そのまま言葉に置き換えたことが出来たとは思えない。そこには、書くことへのもどかしさといったものがあるはずであり、それを自意識の不透明さ（内面）といったものに帰すのではなく、表現された言葉の、透谷という主体を巻き込んだ、一種の運動として語ることが出来るようにも思える。つまり、透谷の言葉が不可避にはらむ〈異和〉を見ていくことが、そのまま透谷論になりえるということだ。そのような目論見のもとに、透谷の散文（主に評論）について少し論じてみたい。

二

透谷の手紙が透谷を知るうえで貴重な資料であることは言うまでもないことだが、透谷の手紙の貴重さは、透谷の作品からでは知り得ない透谷像を知るという意味よりも、透谷像が透谷自身の手によって直截にあらわされているということにあるだろう。

一八八七（明治二〇）・八・一八の石坂ミナ宛書簡、同八月下旬の父快藏宛書簡のなかで、透谷は自己の政治上の挫折、事業の失敗、恋愛について分析を繰り返す。何とも奇妙な手紙であるに違いない。人は普通父親や恋人にこんな手紙を書くものなのか。一体本当に透谷は石坂ミナや父快藏に読んでもらいたくて手紙を書いたのだろうか。八・一八の石坂ミナ宛書簡のなかで、透谷自身の手になる自己史は次のような文章によって始まる。

> 嗚呼若し生をして一の大家たるを得るあかつきありと念はしめば、生は今に於て己れの履歴を語るの必要なかるべし、生は寧ろ堂々たる自傳を玉の如き名筆を以て書き始む可し、然れども其望なしとせば、生はしばらくの間、おもしろき妄想を持ちたる事を慙さず白状するこそ能けれと思ふなり、げに生の生活は世の有為の少年の為めに一部の警戒書となるべし、生の失敗は以て彼等に示す可し、秘し隠す可き者にあらず

これは、告白小説の書き出しではない。石坂ミナにあてた手紙の一節なのである。この文章がいかに告白小説的であるか。比較してみたくなるのが次のような文章である。

私は、かって例もなかったし、将来真似手もあるまいと思われることを企画するのである。一人の人間を、全く本然の真理において、人々に示したい。その人間とは、私である。

ただ私だけだ。私は自分の心を感じ、人々を知って来た。私の人となりは私の会った人々の誰とも似ていない。いや世のあらゆる人々と異なっていると敢えて信じようと思う。偉くないとしても、少なくとも違っている。自然の手で叩き込まれた型を、自然は毀す方が善かったか悪かったか、それは私の本を読んでから判定すべき事だ。（中略）数限りない人々の群れを私の周囲に集めてくれ給え、人々が私の告白をきき、私の下劣さに悲鳴をあげ、私のみじめさに赤面せん事を。彼らが各自、同じ誠意をもって、貴方（自然）の帝座の下に、その心をむき出しにして欲しい。もし勇気があるなら、たった一人でも、貴方に言う人があって欲しいものだ、私はあの男よりはましだった、と。

これは、小林秀雄の「私小説論」の冒頭に引用された、小林秀雄訳になる、ルソー「告白」の書き出しである。このよく知られた文章がいかに、透谷の手紙の一節に似ていることか。否、透谷の手紙がこの文章に似ていると言うべきか。

小林秀雄は「私小説論」のなかで、「ルソオは『懺悔録』でただ己れの実生活を描こうと思ったのでもなければ、ましてこれを巧みに表現しようと苦しんだのでもないのであって、彼を駆り立てたものは、社会における個人というものの持つ意味であり、引いては自然における人間の位置に関する熱烈な思想である。」と書いている。つまり、ルソーの「私」は、「社会における個人というものの持つ意味」が重要なものとして成立した、近代社会における、「人間」に関する思想のあらわれだと述べ、そして返す刀で「西欧に私小説が生まれた外的事情がわが国になかった」ために、「わが国の自然主義文学運動が、遂に独特な私小説を育て上げるに至った」のだと裁断する。

さて、小林秀雄の言いかたに倣えば、「西欧に私小説が生まれた外的事情」を持たない透谷の告白における「私」は、ルソーの「告白」における「私」では当然ないだろう。とするなら、この、わが国の「独特な私小説」の「私」がまだ生まれる以前に透谷によって告白された「私」の意義とはなにか。それは何故ルソーの「告白」の書き出しと似てしまうのか。

ミシェル・フーコーは「言葉と物」のなかで、「十八世紀の末葉は、十七世紀初頭にルネッサンスの思考を破壊したそれと対称的な、ひとつの不連続によって断ち切られている。」[注2]と述べているが、近代に至るその不連続の連続とも言うべき展開の一つに、「人間」の創造をあげる。それは神に対する人間といった意味での「人間」でなく、経験と認識の主体であり同時にそれを可能にする先験的な場所としての「人間」を意味している。つまり、「人間」を超越的に見るのでなく、「人間」以外の超越的な場所に「普遍」を見いだすのでもなく、有限的存在であるが故に、その経験と認識に「普遍」の起源を見いださなければならないものとしての「人間」が見いだされたというのだ。この「人間」はルソーの「告白」における「私」に置き換え可能だろう。ルソーの「私」もまた、「私」という体験と認識のなかに、「普遍」を見いだそうとしているからだ。とするなら、「経験」し「認識」する「私」の創造こそ、不連続として生

じる近代の問題となる。

透谷の「私」もまた、「経験」し「認識」することに「普遍」を見いだそうとする「私」の創造だったのではないか。無論、ルソーの「私」が透谷の「私」と同じだとは言わない。ただ、透谷は透谷が属した日本近代における〈知〉の言説の、不連続な切れ目にぶつかっているとは言えるだろう。自己の体験の言述に「普遍」への予感があったからこそ、透谷はルソーの「私」のように、告白出来たのだ。

だが、ルソーの「告白」が日記でも手紙でもないことを確認しなければならない。ルソーの「私」は、近代小説の先駆とも言うべきこの「作品」のなかに仮構された「私」なのである。

透谷の「私」は、石坂ミナ宛の手紙の文章にあらわれた「私」である。ここに、透谷の告白の特異さ、ひいては、日本近代が恐らく最初に経験した告白の特異さがあると言うべきだろうか。

人は普通自分の恋人への私信に「生の失敗は以て彼等に示す可し」などとは書かない。この手紙には、明らかに「普遍」が指向されており、その意味で、透谷によって仮想された「普遍」の受け手としての読み手が、この手紙には想定されていると考えざるを得ない。読み手の石坂ミナは、透谷にとって単なる私信の相手ではなく、「普遍」の受け手として不特定多数のまなざしを持ち、そのまなざしによって透谷の「私」に「普遍」を見いださせもする、重要な存在だったのであろう。この時期の透谷の手紙は、手紙であって手紙ではないのである。例えば、この手紙のすぐ後に書かれた「一生中最も惨憺たる一週間」は、「余は是を記憶せんが為に時と紙筆とを費やす者なり」という書き出しで始まる透谷の手記であるが、「今、此栄誉ある一貴女は深く余をラブするに似たり、余は既に余が企てたる事業にして、成就す可き望ありと仮定するを得ば、速に此愉快なるラブを受けてラウスの花を挿む可し、嗚呼是れ望む可からず、余の事業は成らざるべし、余は漂零して首を青山に暴らす可し、余は断然身を下等社界の巣中に隠くす可し」と、石坂ミナへの「恋愛」とそれを否定し去ろうとする透谷の葛藤を書き連ねたこの文は、明らかに分裂した自己をそのまま記述することが「普遍」に近付くことだという認識に支えられているだろう。手記であることから、誰のために書かれたのでもなく、「普遍」を了解してくれる仮想の読み手に向かって書かれているのが知れるのだが、しかし、その執要な自己分析を繰り返す文体は、前記の石坂ミナ宛書簡や父快蔵宛書簡とほぼ同じである。

このことは、透谷の手紙の、手紙であって手紙でない性格を証するのだが、それでもやはり手紙でしかないということの意味とは何だろう。

北川透氏はこの時期の透谷を次のように説明している。

自由民権運動敗退以後の二年間に進行した自己解体の底で、つまり、あの〈一生中最も惨憺たる一週間〉の内部で、透谷みずからの来歴から、家庭や現実の上に露出した風土的感性との異和を拡大することで、そこに書くことの初源を見出したこと、そして、書簡という形式を仮装なるものとして、それを虚構の文体にふくらませていったこと、そのことのうちに彼の倫理感の性格はかくされているはずだ。透谷は、おそらく生育期においては家庭環境に、長ずるに及んでは社会的な現実に、それぞれ露出した風

土的な感性への異和や衝突を繰り返すたびに、そこにおける自己解体を、観念の肥大へ、書くことの不可逆性へ転化していったのである。[注3]

また、透谷の倫理感を突き詰めればそこに「風土的現実との異和と自己異和による存在の欠如を、観念の肥大によって満たすことで、観念の世界それ自体を、現実世界と同じ比重で、それと強力にきっ抗させる透谷文学固有の貌がせりあがってくる」[注4]と述べ、透谷における現実と観念の〈転倒〉がこの時期に進んだことを指摘している。それは手紙を「仮装なるもの」として「虚構の文体にふくらませて」いくことにあらわれるのだが、氏は別のところで「透谷が手紙を書こうとして、むしろ、手紙からはみだし、書くことそのものの深淵のうちに入っていってしまうのをみることができる。」[注5]と、透谷の書く行為における過剰さについても言及している。

このように、この時期の透谷は、書くことがすでに「虚構の文体」に成らざるを得ない状態にあったとみていいだろう。手紙も例外ではないということなのだが、しかし、この時期の手紙の文体が、その後の透谷の散文（評論）の特徴、徹底した自己への認識、「普遍」への指向、を獲得したと考えるとき、やはり、それが手紙であるということにこだわりを感じざるを得ない。

一体、透谷の手紙の差出人である石坂ミナや父快藏は、透谷の表現にとってどんな役割を持っていたのだろう。

すでに述べたように、手紙の文体は、「普遍」の受け手である不特定多数の読み手を想定している。とすれば、彼等は、透谷にとって不特定多数の読み手として装われた一人の確実な読み手である他はない。石坂ミナや父快藏がもし恋人や父親としての確実な読み手以外の何ものでもなかったとしたら、透谷は「虚構の文体」をふくらませることは出来なかったろう。恋人や父親というまなざしのなかでしか透谷は言葉を選択出来なくなるからで、恐らく、相手との関係の現実性に沿ってしか表現は展開しないだろうからだ。透谷にとって、彼等は、その意味での恋人や父親ではない。が、それなら、不特定多数として「普遍」の受け手である資格さえ持つなら、誰でもよかったのかということになると、やはり、その読み手は石坂ミナであり父快藏でなければならなかったのだ。

もし、彼等が、石坂ミナであり、父快藏であることを放棄して、不特定多数としての無名の読み手に成り切ったとしたら、今度は透谷は書くということさえ覚つかなかったに違いない。何故なら、そのとき、透谷は透谷の個人的な世界とつながっていた読み手を失うからであり、本当のところ透谷のことなどに一切関わりを持たぬかも知れない未知の読み手に向かって表現は投げ出されてしまうからである。この時期（明治二〇年）に、透谷個人の「経験」と「認識」の告白を、「普遍」として受け止めてくれる不特定多数の読み手など居るはずもない。とするなら、透谷は「虚構の文体」をふくらましようがなかっただろうし、たとえ、投げ出したとしてもそれを「普遍」への言説として回収することは不可能だったのである。

が、それでも、未知の読み手に向かって表現を投げ出さざるをえないところに、余りに早く時代の不連続の切れ目に遭遇した、透谷の表現の困難があるとするなら、透谷は、言葉の背後に言語化されぬさまざまな思いや感情を貼りつけたまま、表現せざるを得なかった。そして、恐らく、言語化されぬこの領域での透谷の表現をよく

理解してくれるものこそ、透谷という存在の内部に出入りすることが出来た、石坂ミナや父快藏だったのだ。

つまり、彼等は、透谷にとって「虚構の文体」を引き出してくれる近しい一人の確実な読み手であり、同時に「普遍」を了解する不特定多数の読み手として透谷に装われもするという、両義的役割を担って、手紙を受け取らねばならなかったのである。

このことは、透谷にとって手紙がいかに重要な表現の手段であったかを示すだろう。と同時に、現実における確実な読み手の保証のもとでしか、「普遍」を指向する散文の文体を作りえないという、最初の躓きをここで見せているのだ。

ここで言う不特定多数の読み手とは、誰しも自分に向かって書くという意味で透谷自身のことと考えてもいい。とすれば、石坂ミナも父快藏もまた透谷自身である。ということは、透谷は自身のなかに透谷という確実な読み手の存在を常に必要としているということを示す。野山氏が、透谷の散文の力強さを「自己の感覚以外の何者も頼りにならぬことを透谷がよく知っていたから」と述べているのは、このような透谷固有の表現意識を指しているのだと思う。

しかし、そのことは、透谷が自分の表現に対して常に自意識が過剰であるということを意味するのではない。石坂ミナや父快藏がけっしてそのまま透谷自身に重なるものではないだろう。彼等の表現における機能が、透谷の十全でない表現を未知の読み手の前に引き出し、あるときは虚構に過ぎる文体を現実の感覚の側へ引き戻したりもすることにあるとするなら、それは、透谷自身の表現意識にはらまれた言葉に対する実存的な感覚、あるいは透谷の表現がはらんだ〈異和〉といったものと言っていいのではないか。

だが、その〈異和〉によって、透谷の散文は、「虚構の文体」として上昇しつづける可能性をあらかじめ摘み取られ、真の不特定多数の読み手に投げ出される見通しが与えられていない。これはまた野山氏の言う「透谷の鋭い直感が言語意識をどのように規制したか」という問題でもある。「普遍」を目指す文体でありながら、「直感」もしくは「確実な読み手」から離れまいとするために、「論理」の自律的な展開を拒んでしまう文体となってしまう。

透谷のこのような散文表現の特徴は、手紙において最も象徴的に現れ、そのまま評論の文体をも規制していくことになる。

三

透谷にとって、表現された言葉は透谷自身に密着しすぎている、と言えるだろうか。そのような性格を刻印されてしまった評論の文体は、その全体の論理的構造よりも個々の言葉に込められた透谷の感性が輝きを帯びる、という形で展開している。

君知らずや、人は魚の如し、暗きに棲み、暗きに迷ふて、寒むく、食少なく世を送る者なり。（時勢に感あり）

恋愛はひとたび我を犠牲にすると同時に我なる「己れ」を写し出す明鏡なり。男女相愛して後始めて社会の真相を知る。（厭世詩家と女性）

遊郭は即ち砂地なり、其中に生えたる花は即ち遊郭的恋愛なり、美の真ならず自然ならぬ事多言を用ひずして明瞭なる可し。

（『伽羅枕』及び『新葉末集』）

燈火再び晃々たり、われ之を悪くむ。内界の紛擾せる時に、われは寧ろ外界の諸識別を遠ざけて、暗黒と寂寞とを迎ふるの念あり。内界に墜入する事深くして、外界の地層を没却するは自然なり。内界は悲恋を醸す場なる事を知りながら、われは其の悲恋に近より、其悲恋に刺されん事を楽しむ心あるを奈何にせむ。

（松島に於て芭蕉を読む）

以上、透谷の初期の散文（評論）から、目につくままに透谷の感性がちりばめられている文章を挙げてみたが、透谷の評論における文体の特徴がよくでているように思う。これらの文体には、論理の展開のなかからある帰結を導き出そうとする思考の動きはあまり感じられず、透谷の思考の核が、透谷の直感によって、そのまま映像化され言葉に置き換えられたという印象がある。従って、非常に断定的で説得力があるのだが、それ自体論理的であるわけではない。このように、短い文章として取り出しても透谷の思考の息づきをそのまま伝えているし、透谷独特の世界が、それぞれの短い範型の映像のなかにくっきりと映じている。

この思考の映像とでも言うべき透谷の文体は、視覚的もしくは身体感覚的な物や事の表象に置き換えていく表現によって際立っている。「暗きに棲み、暗きに迷ふて」「我れなる『己れ』を写し出す明鏡なり」「遊郭は即ち砂地なり、其中に生えたる花は」「其悲恋に刺されん事を」等々、これらの表現は、透谷の内面を具体的イメージで一挙に把捉し、透谷の文体の核になることによって、透谷の散文（評論）の全体の印象を支配してしまっているのである。

このような文体というものは、言葉が、まだ不特定多数の読み手に向かって投げ出されていないことを示している。透谷の直感によって把握された映像の表現を、また直感によって理解してくれる読み手に向かって、透谷の表現は成立しているのだ。つまりまだ透谷は、透谷の感性を共有しうる不特定多数を装った確実な読み手の保証、あるいは、透谷の表現意識のなかにはめこまれた言葉に対する実存的な感覚の保証を、必要としていると言っていい。

確かに、透谷の言葉を「普遍」として受け取ってくれる、文学における真の不特定多数という読み手は、明治二十年代にはまだ現れようがなかったろう。それは、西欧的市民社会が成立しているとかないというようなことではなく、西欧との接触によってはっきりと形を顕してきた〈内面〉からのまなざしが、「普遍」の起源としてまだ受け止められるに至っていない、ということを意味する。内面を〈制度〉として形づくった日本の近代はその意味でまだ未成熟であったのだ。

だが、透谷の表現が、論理的であるよりも〝直感〟的であるがゆえに、シンパシーをわたしたちがまだ感じるのだとしたら、わたしたちの属す現代もまだ未成熟なのだということになりはしないか。

例えば、透谷のその〝直感〟的であるがゆえの像にシンパシーを感じた一人に中野重治がいる。中野重治は透谷について次のように述べている。

透谷の頭のなかに花咲いた観念論的理想主義はイギリスに咲いたものの映像であった。イギリスではそれが大地から咲いた。日

本ではけれども大地から咲きえなかった。大地がなかったのである。それはついに美しい切り花でありむしろ一茎の造花であった。だからそれは愛山らの小ぎたない実証主義に敗れた。透谷の咲かせようとしたほんとうの花は、実はこの小ぎたない実証主義を生みだしたものの進路の上に咲かなくてはならなかったのである。それの咲く時はけれども来なかった。小ぎたない実証主義を生みだした日本の資本主義が特異の発展をとげたことを人は知っている。だが透谷の敗れたのは日本の資本主義にであって、それのために小ぎたない実証主義をかつぎまわった一個の俗学者山路愛山にではない。この薄命の秀才の抱懐したところのものは今それと全く別個のものによって継がれている。戦闘的唯物論による資本主義の奴僕としての実証主義の絞殺がはじめて透谷をよみがえらすだろう。（芥川氏のことなど）

中野重治もまた透谷の表現を「美しい切り花」といった〝直感〟の側で受け取ろうとしていることがよく分かるだろう。つまり、中野重治は、山路愛山と透谷との論争を、論理的である小ぎたない実証主義と、論理的ではないにしても透谷の観念の実感的な正しさ、との戦いと見た。そしてそれを、資本主義とマルクス主義、もしくは資本側とプロレタリアートの戦いに擬定するのである。このような擬定が可能なのは、山路愛山と透谷との論争を、近代における知識の複雑な受容という問題を抜きにして、強者と弱者の戦いと捉えたからである。恐らくそこには、マルクス主義という論理の側にいながらも現実には弱者である中野重治の、実感の側に身を寄せざるを得ない自身へのまなざしが入ってしまっているのだろう。が、本当は、論理と実感を加害者と被害者のように容易に対立させてしまうその思考自体に問題がある。透谷と山路愛山との対立を善と悪との対立のように擬定するとき、中野重治は、弱者である自分にとって加害者が何者であるかを、透谷に対する加害者の正体として説いてしまっているのだが、たぶんそこには、日本的近代の不連続的な知識の展開のなかで、自らの「生き方の問題として」実存的に知識を受容しようとした透谷に対して、山路愛山を功利的な知識の受容に終始し「生き方の問題」を不問したものとする評価がある。

この評価が全く外れているというわけではない。ただ、そこには、「普遍」に性急すぎる余り論理的であるよりも〝直感〟的になってしまう透谷の未成熟と、未成熟であるからこそ「論理」的でありあいまいな個人の「生き方」を不問にするような愛山的立場が、実は相補的な関係にあるという理解が欠けているのである。マルクス主義が日本の知識人を席巻していったのは、それが日本の社会からは生まれない「思想」であり、その社会であいまいな「生き方」を強いられる彼等の「生き方の問題」を不問にしてくれる「論理」であったからだ。が同時に、マルクス主義は「論理」であるより先にそういう「生き方の問題」でもあったのである。マルクス主義という「論理」に傾倒し、それをたやすく「生き方の問題」に転化してしまった代表的知識人こそまさしく中野重治だった。

たぶん、中野重治は自己を弱者に位置付けたとき、この日本の近代がつくりあげてしまった相補的関係という構図から抜け出し、自分をあらためて〝直感〟的である透谷の側に置いてみる必要を感じたのである。が、そのとき自分もまた愛山的立場にいたのだという認識を落とすことで、愛山的立場を加害者としての資本主義に擬定

してしまうのだ。

中野重治の透谷評価は現在の透谷論における透谷観に抜き難い影響を与えているが、そのことは、わたしたちもまた「論理」的であるよりも〝直感〟的である透谷の側にシンパシーを感じるのだということを示している。そしてそのときわたしたちもまた愛山的立場にいるという事実を落としているのかも知れない。が、そう言えるためには、透谷の散文を〝直感〟的なものとして規制した近代の未成熟さを、現在もそのまま受け継いでいるとしなければならないだろう。そうであるとき、わたしたちは相補的立場としての愛山の側にいることにもなるからだ。

が、そうであるとしたとき、それは果たして〝未成熟〟といったものなのだろうか。無論、この言いかたは西欧的近代に対して〝未成熟〟ということである。つまり、「普遍」を目指す表現が、真に不特定多数の読み手に受容されたとき、その表現は「普遍」として定位されたと考え、それが西欧的近代において成立したものであるから西欧的近代を〝成熟〟としたわけである。これは、日本の近代が西欧を理想として自らの対極に置いたということであって、実際の西欧的近代が成熟していたかどうかという問題ではない。が、それでもやはり〝未成熟〟という言いかたには引っ掛かりがある。なぜなら、そこには、透谷の表現は未完成なのだから〝成熟〟に向かうはずだ、という考えかたを生むからで、そのときの〝成熟〟に、「生き方の問題」を不問にしないで「論理」的であるような表現が成立する保証はなにもないからである。中野重治流に言えば、透谷という「花」が大地から咲く保証はなにもないということだ。その〝成熟〟が、日本の近代が西欧的近代という名のもとに勝手に作り上げた幻想でないと言い切る保証はどこにもないのである。

むしろわたしたちは、透谷の〝直感〟的表現も一つの成熟の仕方なのであると考えるべきなのではないか。あるいは、透谷の「花」は大地でなくとも確かな地面から生えたものであって、「切り花」などと見る必要はないのではないか。とするなら、透谷は「観念論的理想主義」ではないし、愛山もまた「小ぎたない実証主義」と言い切ることは出来ないだろう。逆に、透谷や愛山を〝成熟〟といった地点から見下ろすその見方が、両者の相補的構図のなかにとらわれていながらそのことに気付かないで、両者を善と悪のように対立させるわたしたちのものの見方をつくりあげてしまっているのではないか。

という言いかたが認めてもらえるなら、透谷に対してわたしたちがシンパシーを感じるのは、近代の〝未成熟〟がまだ継続しているからではなく、透谷の〝直感〟的表現の現れかたが、わたしたちにとっての表現の問題そのものであり、同時にその起源でもあるからではないか。つまり、わたしたちもまた不特定多数を装った確実な読み手の保証のもとでしか、なかなか言葉を投げ出すことが出来ないということなのであり、それは表現の〝未成熟〟の問題ではなく、わたしたちの表現の固有の問題ではないか、ということなのだ。

このことは、近代日本文学の「批評」の文体の問題としてもたぶん語れるだろう。が、それはあらためて論じるべきこととして、ここでは、透谷が形を与えてしまった散文表現の一つの様式に、中野重治もとらわれ、わたしたちもまたとらわれているのだということを指摘しておくに止どめておく。

四

さて、表現が透谷のように〝直感〟的になっていくのは、言葉が、送り手と受け手との強い現実的な関係に沿ってしまうからだと思われる。そのなかで「普遍」を語ろうとするとき、まずその現実的な関係性は一旦否定されなければならない。従って送り手のなかに表現の「ずれ」が生じるが、その「ずれ」は体系的に「意味」を書き連ねることによっては解消されない。なぜなら、受け手はあくまでも現実性にそってしか表現を受け取ろうとしないからだ。そこで、送り手は、その現実のなかで何故「普遍」を語らねばならないかという「生き方の問題」を「普遍」として語らねばならなくなるのである。透谷の言葉が〈異和〉をはらむというのは、透谷という送り手が現実性と「普遍」の両極に岐れる「ずれ」を持ってしまうということなのだ。「真の不特定多数という読み手」は、「普遍」を「普遍」として語りうる送り手と受け手の関係性のある水準を示すが、その水準を持たないからこそ透谷は、そういった読み手を装った現実の読み手に向かって「普遍」を語らねばならなかったのである。

「生き方の問題」を「普遍」として語らねばならぬとき、「虚構的」であろうとする「普遍」を目指す言葉は同時に現実的でもあろうとする。つまり、現実の実感に裏打ちされた言葉であろうとする。とすればその表現は「意味」の言語であるより、「意味」以前の実存的感覚を表現しようとする比喩的言語足らざるを得ないだろう。

以上が、透谷の表現が〝直感〟的な映像の文体になっていくことの理由だと思われる。その理由によってか、いくつか取り出してみた透谷の文章は、作品全体の論理構造のなかに収まって初めて輝くようなものでもなく、それ自体をとりだしても十分に詩的な表現のように輝いている。透谷の体熱が言葉にまで放射されて言葉自体が熱を帯びている、という印象さえあるが、それは、繰り返すが、透谷の言葉が、透谷の現実にまとわりついたものであり、透谷という個体の実存的感覚に裏打ちされている、ということによっているだろう。また、透谷の評論が、論じようとする対象の中心をよくつかまえることが出来ているのは、言葉を俯瞰的位置に固定し、そこから可視的であるような社会の表層を切り取るのではなく、その〝直感〟的な言葉で対象の只中に跳びこんだからである。従って、透谷の表現は論理的につながって次の言葉が用意されるというより、直感によって次々と言葉が生み出されている、という印象を与える。それでも透谷の評論が対象に対する的確な批評でありえているのは、透谷の現実感覚が的を外していないということだろう。

しかし、このような〝直感〟的文体に支えられた透谷の評論は、極めて不安定なものにならざるを得ない。評論もまた仮構された作品である他はないが、その「仮構性」を統括するものが「普遍」としての「論理」でなく、透谷の〝直感〟に裏付けされた言葉でしかないとするなら、その「仮構性」は透谷という個体の調子もしくは透谷の属する現実の動きのなかで、揺れ動くだろうからだ。まして、透谷の「生」の根拠が、「普遍」を目指す表現にしかないとするなら、透谷自身もまた最初から支え所を失って揺れ動くしかないのである。

従って、透谷の表現は、透谷の体熱が下がり始めたときあるいは

透谷にとっての現実が色あせ始めたとき、その対象の只中に跳びこむような力を失ってしまう。そのとき、透谷は、さらなる「普遍」へ向けて言葉を定位させようとあせり始めるのである。

そのような透谷の「揺れ」は、透谷の言葉の運動、残された透谷の評論を跡づけていくことである程度見ることが出来るように思う。例えば、そのようなあせりは「各人心宮内の秘宮」を書く前に訪れ、それを書かせる動機となっている。そしてその動機は「三日幻境」を書くことのなかで用意されたのではないかと考えている。

―この稿続く―

注

注1　これに関しては、拙論「北村透谷の表現意識―作品への異和―」（明大日本文学11号）を参照。

注2　ミシェル・フーコー「言葉と物」（渡辺一民・佐々木明訳　新潮社　一九七六・六・五　二三七頁）

注3　北川透「北村透谷試論Ⅱ」（冬樹社　昭和51・9）三六三頁

注4　同　三六四頁

注5　同　「北村透谷試論Ⅰ」二三頁

（本学大学院博士前期課程修了）